［メルディア］

一般財団法人メルディア広報誌

MELDIA

知的障がい者と共に

働くこと

知的障がい者と共に

歩むこと

大矢真那による取材

障がい者を応援！いきいきと働こう！

ローランズショップ原宿 × 大矢真那

布施博による取材

布施博が訊く

衆議院議員 長谷川かいち × 布施博

施設訪問記

知的障がい者施設訪問

栃木県足利市 ルンビニー園

映画のモデル

障がいと闘う演歌歌手 木田俊之

映画「いのちあるかぎり…木田俊之物語」

人気連載エッセイ

知的障がいを持つ息子と私

水越けいこの「M size／はじまり」

月刊メルディア
VOL.4
TAKE FREE

MELDIA | 2018 APR. | VOL.4

月刊メルディア　4月号　2018年2月25日発行（毎月1回25日発行）第4号 通巻4号
発行所／一般財団法人メルディア事務局　〒163-0632 東京都新宿区西新宿1-25-1 新宿センタービル32F

TAKE FREE

手は離すが目は離さない

失敗から学んで先に生かすこと

これなら誰でも挑戦できるはず

「失敗させないように」ではなく「失敗も含めて経験して欲しい」、「失敗を学びに変えていくという経験をして欲しい」。そう語る株式会社LORANS. の福寿満希代表。「福祉を売りにせず一般市場で勝負したい」という彼女の店舗は、そのスタッフの多くが何らかの障がいを持っているという。街の可愛いお花屋さんをやりたかった彼女は、その花屋に障がい者雇用を結び付けた。

障がい者雇用がウリではなく 高品質な商品やサービスが肝

大矢　ローランズさんはどんな事をされているところなのかをお教えください。

福寿　はい、基本的にはお花屋さんです。ショップは駒込と川崎と原宿の3店舗がありまして、この原宿の店舗では花の他にスムージーと軽食も扱っています。

大矢　お花屋さんと障がい者雇用を結びつけようと思ったのはどんなところからなんですか？

福寿　私は学生時代、特別支援学校の教員免許を取得しようと学んでいました。その課程の中で教育実習へ行った時に初めて障がいを持った子供たちと接する機会があったんですね。その時に彼らがすごく素敵に見えたんです。普通学校の教育実習にも行きましたが、特別支援学校でやった教育実習の思い出の方が断然強かったんです。ただ、彼らが高校などを卒業した後の受け入れ先、働き口がとても少ないことも、その特別支援学校での教育実習で初めて知りました。その時に「この子たちの働く場を作れたら素敵だな」と、漠然と思ったのが始まりです。そこから、お花屋さんにリンクするまでは少し時間がかかりましたが。

大矢　こちらはいつ開店されたのですか？

福寿　2017年5月です。

大矢　現在、こちらの店舗では何人くらいのスタッフさんが働いているんですか？

福寿　ここは23人ですかね。そのうち7割くらいが障がい枠スタッフです。来店していただいたお客様から「誰が障がいを持ったスタッフか分からない」って言われることも多く、それはきっと、サービスの質を保つための努力をしてきた結果が出ているのだろうと嬉しく思います。私たちは「障がい者の人たちが働いているから来てください」とは言いたくないんです。当社の商品やサービスをお客様に気に入っていただけることで、また来店してもらいたいと思います。お客さまに長くお付き合いしていただくのが目標です。

大矢　障がい枠スタッフにはどのような障害を持っている方がいらっしゃいますか？

福寿　色々な方がいて、例えば知的障がい、身体障がい、聴覚障がいの方もいます。

大矢　健常者と障がい者のスタッフさんは同じ立ち位置で働いているんですか？

福寿　そうです。スタッフ同士で「一緒に考えて働く」ということを重視していて、それがスタッフ同士の働きやすさにも繋がっていると思います。お客さまからご依頼をいただいた花束に対して「こういうお花が良いんじゃないか」とか、「このやり方はこう変えたほうが効率が良い」とか、障がい枠スタッフからの改善の提案など数多くあります。また、失敗を経験することもとても重要で、「できなかった」「苦手だ」ということを障がい枠スタッフ自身が認識し、その上で改善に向かって本人たちも努力することで前に進んでいるのだと思っています。

葛西　私の場合は高次脳機能障害を持っています。人によって色んな症状があるんですが、簡単に言えば記憶障害です。物事や仕事の順番を忘れてしまうとストレスになりますので、分からないことがあったらすぐに誰かに聞くなどして解決するようにしています。

大矢　そういう理解が会社にあるというのは、働く側も心強いですよね。

葛西　何でもやるつもりでここにお世話になりました。僕には目標があるので、そのための訓練としてここで働かせてもらっています。

大矢　こちらでは何の担当なんですか？

葛西　マルチプレイヤーとしてやってます。

福寿　やはり業務に波が出ますので、空いた箇所をサポートするのがマルチプレイヤーです。お店ではみんなのアニキ的な存在ですね。（笑）

葛西　ここで働き始めてから、一か月一か月が早く感じます。やることが無いっていうのが、本当に一番辛かったので、働けることが一番嬉しいです。今は充実していますね。

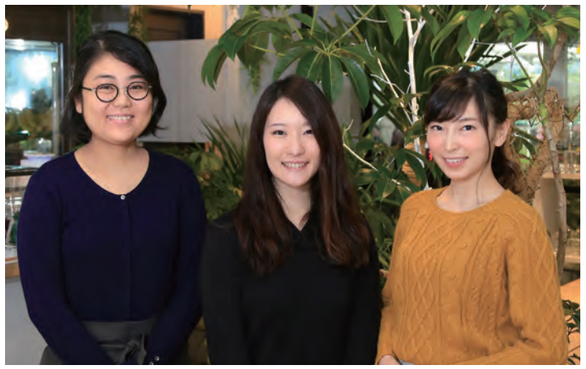
得手不得手は誰にでもあるが ポテンシャルは計り知れない

大矢　障がい枠スタッフの仕事内容というか、担当などはどう決めているんですか？

福寿　仕事には花束の制作、生花の手入れ、フロント業務、バックヤード作業などありますが、障がい枠スタッフには様々なチームの業務を経験しながら、自分の得意なことを探してもらうようにしています。その人の障がいによって、得手不得手があったりもしますから。

大矢　得手不得手があるのは、一般の人たちや私たちも同じですよね。

福寿　彼ら一人一人が高いポテンシャルを持っていることがあって、時には健常者よりも高い能力を発揮することもあるんです。そういう部分を生かすために、スタッフ同士でしっかりとコミュニケーションを取り、何でも話し合えるよう、チームで一丸となって頑張っています。勇気を出して何にでもチャレンジして貰えるよう、みんなで協力してやっています。



障がい枠スタッフのみなさんの誰もが障がいをお持ちのようには見えませんでした。とても良い職場環境なのだという事がそこから伺えました。

ローランズショップ原宿店
東京都渋谷区千駄ヶ谷３丁目 54-15　ベルズ原宿ビル１F
http://www.floran-jp.com/harajuku/

福寿 満希
Mizuki Fukuju
株式会社 LORANS. 代表

葛西 久
Hisashi Kasai
株式会社 LORANS.

大矢 真那
Masana Oya

トウテミル！

知的障がい者の雇用について問うてみる

MC／女優
右手 ナギ
うて・なぎ

もし自分が障がいを持ったら希望の持てる職場で働きたい

落ち着いた雰囲気、緑溢れる店内。スムージーも軽食も味はもちろん見た目が鮮やか！

今回の取材先は、どこを撮っても「インスタ映え」する「ローランズショップ原宿店」です。まるで「魔女の宅急便」の主人公・キキの実家の様なお店で働いているのは、健常者と障がい者のスタッフさんたちです。

健常者のスタッフが障がい者に対して理解があるのはもちろんですが、とにかくみなさん仲が良い。それと、障がい者にもチャレンジする機会をたくさん用意している所が素敵です。

ローランズではスタッフ全員の意見を聞くためのミーティングが頻繁に行われているとのこと。障がいの有る無しに関係なく、誰でも自由に発言し、意見を交わすそうです。

障がい枠スタッフの代表として自身の事を話してくれた葛西さんは、元々は健常者だったといいます。ところが、仕事中に事故に遭い、病床で目覚めると障がい者になっていたそうです。

ある日突然、障がいを持った自分のことを想像できますか？　私にはその時の葛西さんの心の内を想像すらできません。

現在こうして、たまたま健常者である私も、いつ何が起きてどうなるかは誰にも分らない。それこそ、他人事ではないのです。

葛西さんは、「障がいを持った後、ローランズで働きはじめてから、それまでの退屈だった日々が一変した」と語ってくれました。

もちろん「仕事」ですから、楽しいこと、嬉しいことばかりではありません。覚えなきゃいけないことはもちろん、努力をしなければならないこともあり、当然そこには失敗や挫折などもあるはずです。

福寿さんは「失敗させないようにするのではなく、失敗も含めて経験して欲しい」と言います。障がい者だからといって最初から何かを諦めさせたり、やらせなかったりするのではなく、「まずは何にでもチャレンジしてもらいたい」とも語っていました。

いざ障がいを持った時、自分の働く職場が障がいの有無に関わらず、誰にでも平等に発言の機会や多くのチャンスを与えてくれたら、それは最高だと思いませんか？

障がい者と健常者が何の垣根もなく意見を言い合える。個々の持つ能力を相互に認め合い、「障がい者」「健常者」という括りの無いここの職場環境が最高だと感じました。

取材にご協力いただいたローランズの皆さんとインタビュアーの２人で記念撮影。女子率の高い華やかな職場です。スムージーご馳走さまでした！（右手）

MELDIA

一般財団法人「メルディア」とは

障がいのある方を支援する活動と、スポーツ（サッカー等）を行う児童・青少年を支援する活動を通じて、人々と社会に広く貢献することを目的として設立されました。

「メルディア」の基本理念

一般財団法人メルディアは社会的・経済的ハンディを抱える方々の「未来」に少しでも希望が持てるように、財団の活動を通じて支援し、社会貢献してまいります。

知的障がい者支援

障がい者の子供を持つ親の苦労や不安は計り知れないものがあります。
さらに、親が「片親」の場合は、経済的負担や苦労・不安もその親1人で背負わなければならない状況です。不安な生活の中で、情報交換もあまりできない方々の情報源となるような刊行誌を定期的に財団で作成し、そういった方々への有益な情報提供と、障がい者の持つ課題等を広く社会に知ってもらうこと、そして様々な企業や個人から、支援団体などに対する寄付を募ることを目的として、本誌「MELDIA（メルディア）」を発行し支援活動を行います。

青少年スポーツ支援事業

家庭の事情等で経済的に恵まれない青少年のフットボーラーのための奨学制度

アルゼンチンのロサリオ出身のリオネル・メッシは、経済的に恵まれない低所得な家庭に生まれましたが、チームが彼を支援し彼も成長して世界を代表するフットボーラーとなりました。メッシは才能を評価され、たまたま支援を得られました。しかし青少年の中には、才能があっても経済的な家庭の事情で、サッカーをする環境に恵まれずに支援がないまま、選手としてプレイを諦めざるを得なかったり、適切な環境でプレイすることができない人たちもいます。そういう若者が、日本にも数多くいるのが実情です。
そのような青少年フットボーラーがプレイを継続するために、「頑張る人を支える奨学制度」を財団法人メルディアが実施し、社会に貢献をしたいと考えています。

ALL ABOUT MELDIA

「メルディア」とは？

「メルディア」とは、イタリア語である「メダリア」の造語で「メダルを」という意味です。財団メルディアは、『輝かしい人生』を手に入れて頂きたいという想いが込められた名称です。障がい者本人に加えその家族、また経済的な理由からスポーツが続けられない青少年など、「社会的なハンディキャップ」を持つ人々に対して『夢を諦めることなく挑戦することができる』ように支援をしていくことを目指しています。

MELDIA

財団概要

名　称　一般財団法人 メルディア
（英文名：general foundational juridical person MELDIA）
設立者　小池　信三
設立日　2017 年 5 月 23 日
所在地　〒163-0632
東京都新宿区西新宿 1-25-1
新宿センタービル 32F
電　話　03-5381-3213
ＵＲＬ　http://meldia.org/
ＭＡＩＬ　prd@san-a.com

布施博が訊く

布施 博 × 長谷川 かいち

Hiroshi Fuse
1958年、東京生まれ。舞台俳優としてデビューし、数多くの映画やテレビドラマで活躍。バラエティー番組への出演も多い。現在は劇団「東京ロックンパラダイス」と「東京DASH!」を主宰し、後進の育成にも注力している。

Kaichi Hasegawa
1952年、群馬県太田市生まれ。衆議院議員・歯科医師・医療法人理事。日本歯科大学を卒業後、地元で歯科医院を開業。1991年に政界に転じ、太田市議、群馬県議を務めた後、2017年10月、衆議院議員に当選。

知的障がい者に対する認知は広がってきている。とはいうものの、「では行政的なサポートが十分に届いているか」と言えばそうでないのが現状なのではないだろうか。そもそも、障がい者に限らず、介護や子育てなど、周囲のサポートが必要とされる福祉分野は普段あまり顧みられることはない。そこで、現役の国会議員である長谷川氏に福祉と行政の問題を聞いてみた。

地域の医療に取り組む中で政治の必要性を感じて国政へ

布施　今日は昨年の総選挙で見事初当選を果たされた長谷川嘉一先生に、知的障がい者など、社会的にサポートが必要とされる人達を巡る政治的状況や課題についてお話頂ければと思います。というのも、うちの84歳になる母親が認知症で私自身が介護をしなければいけない身になり、妻の方の母もあってダブル介護状態でいろいろ困っているんです。現実問題として、施設に預けなければいけないんですが、一般の人が入れる施設は数年待ち。果たしてこんなことでいいんだろうかと実感するようになったからです。

長谷川　まずは実際にお住いの地域の福祉の窓口に行って相談してから要介護度が判定されて、介護保険での施設の入所が可能かどうかという段取りになるかと思いますが、それは地域でも取り組んでいかないといけない課題ですね。それは介護だけでなく、子育てや障がいなど、福祉の対象となる分野すべてに当てはまることです。国としては地域包括ケアという構想で、あくまでまだ構想として動き始めたばかりで、介護で言えば、入所できる施設を近県での施設の空きを見つけながら入っていかないといけないというのが現実で、それも住んでいる地域によっては偏りがあります。そういった意味では、残念ながら現状はまだまだ構想とはかけ離れた状態にあると言えます。

布施　群馬県の太田市で歯科医をやられていた先生は、そういった社会福祉的活動を積極的にやられてきたと思いますが、具体的にはどういったことをされてきたのでしょうか。

長谷川　私は地元の群馬県太田市で市議を4年、県議を10年やりましたが、県議時代は保健福祉常任委員会という委員会で委員長として保健福祉に携わっていました。もともとは大学で歯学を学んでから地元で歯科医師として開業したわけなんですが、最初に学校歯科医師となったのが、群馬県では初めてできた、県立の高等支援学校でした。その背景として、ダウン症など、障がいを持つ方の中には、全身麻酔をしないと歯科の治療が受けられない方がいるんですが、私はそういった方の治療を数多く行っていたということがあったんです。

布施　もともとそういった、地域での活動をしていたということがあって政治家になられたということですか？

長谷川　地域活動を行う中で、地域の行政に関わる必要性を感じて、開業してから7年目に市会議員になりました。政治家になると医療福祉だけでなく様々な問題を扱わなければなりません。他の様々な分野での活動もしてきましたが、医療福祉の分野は専門家でなければ分からないところがたくさんあり、これを中心にやってきたということです。それまではあまり社会的に認知されていなかった歯科衛生士を行政の中で

社会的弱者の声をどう政治の場に届かせて、福祉の分野にいかに政治の光を当てるか。そのためには、健全な野党が育つことが今は先決だと考えます。

正規の職員として採用したり、4つある群馬の県立病院には無かったのですが、私の在任中の10年間で県立小児医療センターに障がい児歯科を設立し、がんセンターに歯科口腔外科の2つを創設するなどしました。

多様性を認める社会目指し 社会的弱者の声を届ける

布施　政治の世界に入られてから見えるものは違ってきましたか?

長谷川　議員は選挙で選ばれてやっと活躍の場に出ていけるものです。本来はここからが勝負なんですが、使命感があって政治家になった人とそうでない人がいる。汗をかきたい人もいれば、そうではない人もいる。でも、そういったあらゆる人を巻き込んで仲間を増やしながら政策を実現していくのが政治の世界です。そこで、勉強会を立ち上げるなどして巻き込む運動を続けてきました。その延長線上として国政があるんです。いくら市や県で改革をやっても国が変わらないといけない。真っ先に予算が削られるのが、末端にある市町村でその次が県。それから障がい者や福祉の現場。弱い立場にある人の声はなかなか政治の中心には届きにくいという現状があります。そういったいわゆる社会的に弱者とされている人の声をどう政治の場に届けるかが大事だと考えています。

布施　障がい者を巡る具体的な政治的課題としてはどのようなものがありますか?

長谷川　知的障がいに限った話ではありませんが、そういったなかなか政治の光が当たりにくいところでは、予算措置が十分に図れているとは言えません。例えば、障害者自立支援法ができても、施設や家庭を介して自立支援の流れが出来ているかと言えば、地域レベルでは進んでいないのが現実です。それは国が単にこういった制度がいいねと頭で考えても、施設やスタッフなど受け皿作りに必要な予算が割かれていないからです。お金がなければ構想ばかり練ったところで現実は変わりません。構想を練るのは官僚の仕事ですから、そこに政治がどれだけ関与していけるか。あるいは、障がいを持つ人の声をしっかりと政治家につなげられるようなネットワークをどう作っていくかですね。

布施　障がい者に対する認知は広がってきているとは思いますが、一方で少数者の声がなかなか政治に反映しない現実があると思います。

長谷川　だから、それを届けられる立場にあるのが我々、野党だと思います。あるいは、与党の中でもそういった意識がある人をどう味方につけていくか。自民党の中にいると、全体の予算の中で考えなさいということになってしまい、弱者の声が届きにくくなっている。だから健全な野党がいなければならないんですが、この前の選挙では、野党が数としては分散してしまいました。この野党の力を今後、どう結集していくかが重要ですが、野合のような数合わせをしていても仕方がない。きちんとした理念でまとめていくことが必要だと考えています。憲法の下で弱い立場の人をしっかり守っていくことが重要です。それには、理念に基づいた健全な野党が成熟してこないことにはダメだろうというのが私の考え方です。あとは、勉強会などを通じて仲間を広げていくという方法。勉強会とか議員連盟というのはそれこそたくさんあるんです。そこに超党派で入ってもらって、一つ一つのテーマについて議論を重ねて法案として実現していく。それも理念を実現する上では実行可能な一つの手法であると思います。

布施　現実問題として、障がい者支援などの福祉には予算がつきにくいものなんですか?

長谷川　実は、各行政分野の現場の人たちは様々な施策的取り組みはやりたいと考えているんです。ところが、例えば障がい者を対象にした福祉政策だと厚生労働省の担当になりますが、厚労省がやりたくても予算は財務省が握っている。財務省にしてみると、様々な大きな声の予算要求の前では、少数者の福祉政策は優先順位が下がってしまいがちですが、我々政治家が議会でしっかり議論した政策を実現するために、それに抗えないような世論を作ってしまえば、予算要求も通るはずです。そういった正攻法で地道に積み上げていくことが大切ですね。

布施　なるほど。政治の世界なんて自分とは遠いものだと考えてきたので、お話は難しいながらも、一口に理想論を言ったところで仕方なく、現実的な問題が政治の世界には様々あることが分かりました。その中で思ったのは、やはり主張すべきことは声を大にして主張していかなければならないんだな、と。それと、長谷川さんのような政治家には我々の代弁者としてこれからも頑張って頂きたいと思います。

一概に理想論を言い立てたところで、政治の場では通用しないことが今回のお話で分かった。焦ることなく先生のような人を応援して、活躍してもらうしかない。

長谷川かいち公式ホームページ
http://www.hasegawa-kaichi.org/

障がいはハンディキャップじゃない 誰もが持つ“個性”のひとつなんです

知的障がい者施設訪問　**栃木県足利市／ルンビニー園**

大矢　まずは、こちらの紹介をお願いします。

篠崎　ここはアトリエ留美（るび）といいまして、ルンビニー園の入所者が絵を描いたり、創作活動をしている場所です。

大矢　こちらには何名いらっしゃるんですか？

篠崎　ここには8名いますね。この他に年配の方がもう一人いて、ただその方は体調も考えて、今はちょっと創作活動をお休みしています。

大矢　ルンビニー園の中にこのアトリエが付帯しているという事ですね。

篠崎　そうです。ルンビニー園は入所定員が50名の施設です。その中から選ばれたというか、絵が得意、絵が好きだという人たちがこのアトリエで活動をしています。私が「描いてみたら？」と勧めて始めた人、ここに入所する以前から絵を描いていた人もいます。私は、彼らの創作に対して「障がい者アート」という捉え方はしていないんです。アート、芸術が先なんです。たまたまそのアート作品を作った人が障がいを持っていただけだと考えています。

大矢　「障がい者アート」では無いのですね。

篠崎　はい。私は障がいをハンディキャップとは捉えていません。これは彼らの個性なんです。私と大矢さんとで個性や考え方が違うように、彼らもそれぞれ違う個性を持っている一人の作家なのだと考えて接しています。

大矢　篠崎さんご自身のことを少しお聞かせください。

篠崎　私は、学生の頃に絵画を勉強していまして、今は本業としては陶器で楽器（創作楽器）を作っています。

大矢　ルンビニー園さんへは、どういうきっかけで関わるようになったのですか？

篠崎　大学を卒業した後、私はここで職員として働いていたんです。もちろん創作活動も並行してやっていました。

大矢　元々はこちらの職員だったわけですね。

篠崎　はい。自分の創作活動をもっと本格的にやりたくなった時期があって、それで一旦退職して、本格的な創作活動の方に向かったんです。そして現在、今は美術班という形で週に2回ほど、アトリエに来て皆さんの活動を手伝っています。それと、絵を見てもらえば分かると思うのですが、彼らが描いた作品は感動するというか、凄いなと思わせるんですよ。だから、彼らが描いたものをそのままにしてしまうのが勿体無いと思うんです。そこから、「彼らの作品を発表してみたい」、「展覧会をやってみたい」と思うようになりました。ですから、私はこのアトリエのような創作の場所を作ってあげたり、画材の提供をしています。

大矢　技術的なことを指導したり、テーマを与えるようなこともされているんですか？

篠崎　いや、作品への口出しはほとんどしません。見てもらえば分かるように、彼らの好きなように、何でも自由にやってもらっています。

大矢　皆さんが使う画材も、「自由にどうぞ選んでください」という感じですか？

篠崎　そうです。絵の具で描く人もいますし、マーカーを使って描く人もいます。

大矢　皆さん凄く集中して創作してますよね。

篠崎　彼らの集中力は凄いですよ。集中している時は私もできるだけ声を掛けないようにしています。彼らの集中力というか創作意欲は凄く高い。誰でも、雑念やら騒音などで集中を邪魔されることがあると嫌ですよね？　彼らにはできるだけ集中して創作活動をさせてあげたい。だから、本当はこういう取材も受けたくないんですよ。私も作家なので、制作してる横でゴチャゴチャやられたら、嫌ですから。（笑）

大矢　騒がしくてごめんなさい。

篠崎 孝司

Takatsukasa Shinozaki

1951年、栃木県足利市出身。芸術家、陶芸家。現・ルンビニー園美術講師。1993年に日本現代工芸展入選。代表作に「Stone Bike」や、水琴窟の原理を応用した陶器製の創作楽器「水留音（すいるおん）」などがある。海外からの取材も多い。

篠崎　いえいえ。でも大矢さんも例えば台本を覚える時とか、演技の練習してる横でゴチャゴチャとやられたら、集中出来なくて嫌でしょう？

大矢　それ確かに嫌ですねぇ。（笑）

篠崎　例え、凄くやりたいことであっても、何にも煩わされずに集中して何時間も続けることは難しいんです。集中して没頭できる、それだけでも素晴らしい才能であると感じます。

大矢　作品の完成はどう決めるんですか？

篠崎　彼らは自分で「できた、終わり！」って言うんです。時々「もう少し描けば？」って言う事もありますけど、基本的には彼ら任せです。

「障がい者のアート」ではなく作家が障がいを持っているだけ

大矢　こういった活動をされていて、「これが大変だ」と思うことは何ですか？

篠崎　大変というか、彼らの作品を「障がい者アート」だと捉えられてしまうことが多いですから、それが残念ですね。「障がい者が描いた作品だから可愛そうなので買おう」、そういう事では無くて、買うのを決めてから「作家さんは障がいを持ってる方なんですね」と後から理解してもらうというのが理想です。

大矢　広報活動という面でのご苦労ですね。

篠崎　私も作家ですから、どちらかというとこ

こ（アトリエ留美）のみんなのことをライバルだと思っていますよ。だから、邪魔もしたくないんです。創作に集中している時に、その気持ちを何かで途切らされることほど嫌なものは無いですから。普段は必要以外はなるべく声さえも掛けたくないんです。

大矢　その感覚は篠崎さん自身がアーティストであるからこそ分かる事ですね。

篠崎　そうですね。私は彼らの作品を観て「こんないいもの作りやがって！」だなんて、ライバル心を燃やすこともありますからね。悔しいなって。私もそうですけれど、一般の人はみんな「絵はこうあるべきだ」なんていう先入観を持ってしまっています。だから、彼らのように自由に絵を描けないんですよ。

大矢　確かにそうですよね。

篠崎　彼らは絵を描いた先のこと、例えば周囲の評価であったり、作家として絵を売ることであったり、そういう雑事に煩わされることがない状態で創作活動に没頭できているし、それらに一切執着しない。思うこと、好きなこと、を自由に描いている。時にはそれを羨ましく感じることもあります。

大矢　皆さんが何を表現しようとしているのかとか、篠崎さんは分かるんですか？

篠崎　「こういうことかな？」くらいは想像することもあるんですが、正直なところ全てを理解することはできません。例えば、彼らが描いている絵を見て私が、「これは丸を描いてるの？」って聞いたりすると、そこでもう、彼が描いていたそれは、「丸」になってしまうんですよ。それまでは丸に見える何か別のモノ、または丸く表現したい何か、だったモノを私が誘導して、「ただ丸を描かせた」ということになっちゃうんですよね。それは彼らの作家性を損なう行為になってしまうのだろうと思います。

大矢　これから障がいを持った作家さんたちのアートというものが、社会的にどんな風になっていったらいいとお考えでしょうか？

篠崎　最近は「アール・ブリュット（※1）」だとかと言われて脚光を浴びてきていますが、純粋に「アーティストの作品だ」とか「作家が障がいを持っているだけ」という考え方が広まっていけばいいと思っています。

大矢　今後の作家さんたちの活動や、展示会などの予定があれば教えてください。

篠崎　これまでにここで作られた作品を中心とした展覧会「アーカシャー（※2）」を4月21日～5月6日に群馬県みどり市の「童謡ふるさと館」で開催します。それと、市内（栃木県足利市）の古民家で現代美術作家を50人集めて開催する展覧会「CON展（※3）」を5月12日～20日に開催します。この展覧会にはルンビニー園からも2名の作家が参加します。

大矢　その2名を選んだ理由は何ですか？

篠崎　これは「ダイナミックな作品が作れるから」ということに尽きますね。美術を少しかじった人なら誰でも分かると思うんですけど、これだけ大きな作品（100号）を生き生きと全力で描けるのは、凄いことなんです。完成までのモチベーションを維持することが難しいくらいのサイズなんですね。

大矢　確かにこのアトリエ留美に入ったときに「ドーン！」とした迫力を作品から感じました。

篠崎　やっぱり誰が観ても分かりますよね。それは、「作品に力がある」という事の証明なんですよ。純粋な気持ちで生き生きとした作品を、しかも大きく描くという事は誰にでも簡単にできることでは無いんですよ。彼らにはそれができる。すごいことですよ。

私が作品からインパクトを感じたのは、作品が力を持っているからなんですね。何でも自由に、思う通りに創作活動をさせてあげた結果なのだと感じました。

※1　フランスなどで知的障がいを持つ作家の作品を「アール・ブリュット（生の芸術）」と呼ぶ
※2　「アーカシャー展」2018年4月21日～5月6日／於：群馬県みどり市「童謡ふるさと館」
※3　「CON展」2018年5月13日～19日／於：栃木県足利市内各所

Msize エムサイズ

はじまり

＜水越けいこ 連載＞

4

息子が小学校へ入学するまで悩んだ末に「普通学級」進学

こんにちは水越けいこです。ちょっとだけ気が早いかも知れませんが、世間では間もなく卒業式のシーズンとなりますね。今日は息子・麗良（れいら）が保育園を卒園し、小学校に入学する頃の事を思い出して見ようと思います。

20年くらい前、彼が保育園の卒園まであと1年という頃、小学校へ入学する際の「クラス」を決めなければならないことになりました。一般のお子さんであれば、「普通学級」に進学するのですが、彼の場合、勉強もそうですが、一般生活における食事や着替え、健康面の管理など、あらゆることが一般のお子さんのようにはひとりでは出来ませんので、「特別支援学級」に進学させるという選択肢もありました。

どちらが安心で、彼にも楽なのかは、私も「特別支援学級」であると承知をしていました。しかし、いろいろと考えていくうちに、「普通学級」に進学したら、特別支援学級より有意義な事が沢山あるのでは？　とも思い始めました。

例えば、彼は一人っ子ですから、自宅ではいつも私と二人きり。それを考えると、「普通学級」でお兄さん的、お姉さん的、きょうだいのようなお友達と出会えるのではないだろうか？　また、健常のお子さんたちの中で一緒に集団生活をすることで、彼にとって刺激や学ぶことが多くなるのではないか？　などです。

結果、随分と悩んだ末に「特別支援学級」ではなく「普通学級」への進学を決めました。

今、本音を言ってしまえば、「普通学級」を選択した後も「本当にこれで良かったんだろうか」という心配がずっとありました。

小学校の入学前に行う面接で、校長先生にも「親として最大限努力します」と宣言し、校長先生を始め、各先生方にも充分な理解を示して頂いて、「普通学級」への進学が決まりました。

1クラス22名の中、時々クラスメイトに助けて貰いながらの小学校生活がスタートし、私自身もクラスの役員になりました。

運動会や遠足、発表会など、なるべく時間を作って学校に出向き、周りの保護者や先生方に息子を理解していただけるよう、最大限のコミュニケーションを取るように務めました。

そのようにして、ようやく小学校で慣れてきたある時、私が先生に「息子は優しいクラスメイトに恵まれて本当に良かったです」と言うと、「いいえ、息子さんが皆の優しさを引き出しているんですよ」と言って下さいました。この言葉はとても有難く、今でも心に残っています。

シンガーソングライター
水越 けいこ

1954年山梨県生まれ。1978年「幸せをありがとう」でデビュー。TBSの朝の番組「8時の空」に田中星児と共にレギュラー出演。その後シングル「ほほにキスして」「Too Far Away」がヒット。現在はダウン症を持つ息子と二人暮らしをしながら音楽活動や講演活動を続けている。

水越けいこブログ　https://ameblo.jp/keiko-mizukoshi/

私が歌うこと、私が話すこと何かが伝わればそれでいい

少し前の事、私と息子の日常生活を一年間に渡って撮影したテレビ番組が放送されました。同じ頃、私と息子との日々を綴った本を出版した事もあり、それまでには無かった「講演会に出て貰えませんか」という依頼をあちこちから頂くようになりました。

全国から、お手紙や電話、メールなどで、「テレビを観て前向きになれました」「悲しみの淵にいた友人に本を勧めたら、もう一度歩き出せる気がすると言ってくれました」というようなメッセージも沢山届き、ついては私の話を直接聞いてみたい、ということだったのです。

とても嬉しかったのですが、当時の私は、講演会など出来るのかどうか、正直不安でした。

コンサートで歌い、合間に少しお喋りする経験はあっても、講演会では一時間以上も話し続ける必要がありますし、またテーマも簡単ではないので、表現者としての資質も問われます。

そのような心境でしたから、考えるばかりで、暫くは講演会に赴くことはありませんでした。その後も多くの方から驚くほど多くのメッセージを頂き、「ああ、本当に色々な方々がいらっしゃって、色々な環境や考え方があるのだな」と徐々に気が付いていく事になります。

人が100人いたら、百通りの環境があるのと同じように、百通りの生き方や考え方があるのだと思いました。ここでようやく「そうか、私が講演会を行う事で、誰かが話の少しの部分でも、何かを感じてくれるならそれでいい」と、そんな思いに辿り着くことができ、講演会をやってみようという気持ちになれました。

今では、様々な地域で多くの講演会を開催させていただいています。多岐にわたる立場の方々への講演会がありますが、おもに子育て中の親御さん達、保育士さん、教職員組合の方々、また福祉関係の方々を前にお話させて頂く機会が多くなっています。

この様な経験の中で、とても印象に残っている講演会がありました。それは、富山県のとある高校へ講演会で伺った時の事でした。

会場に向かう途中も「高校生の皆さんに私の話が伝わるかな」と気にしていました。

ところが、会場となる体育館に集まった大勢の高校生たちは誰一人として雑談もせず、じっくりと最後まで私の講演を聞いてくれ、それにとても感動しました。

後日、その高校の先生からお手紙を頂き、こう記してありました。「ずっと不登校だった生徒があなたの講演会の日だけは聞きに来ていて、あれから毎日、学校に来るようになりました。本当にありがとうございました」と。

この言葉に私自身も救われ、励まされました。立場や境遇、年代は違っても、同じ人間同士で「何か」を感じ合えることはあるんだと。

講演会を続けてきて良かったと思えた瞬間でした。この先も、私が歌う事や話す事が、誰かの「勇気」になってくれれば、嬉しく思います。

水越けいこ「僕の気持ち」絶賛発売中！

つむぐ

知的障がい者と一緒に「ものがたり」を紡ぐ

改めて感じた作品への感動
贅沢な作品集「自筆の絵本」

これまでの連載で、私が「知的障がいを持つ方のアート作品から受けた感動や衝撃」について書いてきました。私が本冊子で執筆するきっかけとなった理由も何度か書きました。

ついに今回、障がいを持ちながらアーティストとして活躍している方と実際にお会いすることになったのです。私としては長い間に抱いていた念願が叶った形となりました。今回の対談に応じていただいたのは、栃木県那須塩原市にお住まいの「清野ミナ」さんという女性です。

取材当日、私が対談の現場に到着すると、ミナさんのご家族が出迎えてくれました。温かい印象の方々でした。彼らと言葉を交わしながら、彼女が描いた多くの作品を観させて頂ける時間を得ました。

初めて見た彼女の絵は、言葉を飲むほどに緻密かつ鮮やかで、それは美しいものでした。

迷いなく書かれた曲線と、敷き詰められたとも言えるほど細かい下書き。その上には、パステルカラーのマーカーで時間をかけて丁寧に塗り分けられた四角や円、幾何学模様などがありました。ペイズリー柄のようにも見えるその絵は、まるで生物の細胞のようにも見えたり、はたまた一つの街を彷彿とさせたりと、それが「宇宙を描いたもの」だと言われても納得できるような作品でした。

彼女の絵は、想像力を大いに掻き立ててくれるのはもちろん、内包されたモチーフを観る側が想像できる力を試されるほど、アートとして完成されたものでもありました。

彼女が色に関して強いこだわりがあることが、その絵を介して私には伝わって来ました。彼女の絵が持つ最大の魅力は、作品内の「配色」にあるように感じました。

時間を忘れて絵を鑑賞していると、気が付けばミナさんとお会いする時間に。しかし、彼女はまだ姿を見せません。対談のセッティングをしようと動き始めると、入口のドアの小窓から誰かがこちらを覗いているのが見えました。

その方こそが清野ミナさんでした。聞けば、彼女は最初から同じ建物内にいたらしく、私が気付かなかっただけで、何度も私たちのことを覗いていたのだそうです。

ミナさんとの対談を始める前に、ご家族の方がミナさんの描いた作品をもう一つ見せて下さいました。それは、最初に見た他の作品と方向性が同じ作品でしたが、一つ大きく違ったのは、作品が一冊の図録になっていたことでした。

ミナさんの数々の作品を網羅したその図録は、ハードカバー製で絵本のような形をした、お洒落な自由帳でした。一見するとただのきれいな表紙の「絵本」に見えましたが、ページをめくると、彼女の絵が1ページに1作品ずつ掲載されていました。しかもそれら全部、直接彼女が描いた作品でした。

彼女の美しい絵の数々がページを繰るほどに毎ページごとに表情を変えて現れてきます。たった一つの作品でも迫力をさえ覚える彼女の絵が、まとめられて本となることで、さらに鮮やかさを増し、一冊の図録が彼女の「世界そのもの」になっていました。この「手作りの絵本」とでも呼ぶべき彼女の作品群に対して、私が口に出せたのは、恥ずべきかな、「すごい」の一言だけでした。

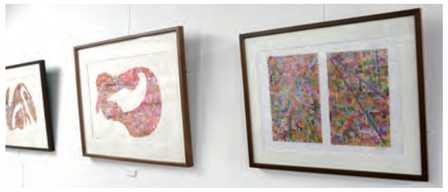
ここでもう一度表紙を見直すと、実はそれも彼女が描いた絵でした。他の作品と同じように、小さな四角や三角などが面積いっぱいに敷き詰められ、その表紙の絵だけでも一流の作品として完成されたものでした。私は感動しきりとなり、またも取材を忘れて絵を見ることだけに没頭していた自分に、はたと気付きました。

仕切り直して取材を開始。改めてミナさんと話してみると、彼女が笑ったときに見せる空気感にはとても特徴があることが分かりました。彼女のそれは、「楽しくて笑う」というより、「嬉しくて笑う」というような印象で、見ている私まで嬉しくなりました。

まず私は、彼女に「色」について聞いてみたいと思い、「好きな色は?」と質問しました。すると彼女は意外な反応をしました。彼女は少しの間沈黙したのです。

シャイな部分もあるミナさんですが、表情はとても豊かです。人の邪魔をしないようにと振る舞う仕草が随所に見られました。周囲に気を配れる素敵な女性です。

取材・文
渡邊 希望　脚本家・俳優
1988年神奈川県生まれ。大学時代に現代小説を専攻。2015年「劇団ショートホープ」を立ち上げる。活動は脚本家と俳優に留まらず演出家としても活躍し、音響も手掛けるなど、多岐に渡って才能を発揮する。



色彩と配置の絶妙なバランス
彼女と過ごした贅沢な時間

一瞬、対談という形をとってしまっているせいで、彼女が喋りづらくなってしまったのかもしれないと思いました。しかし、そういう訳ではなかったようです。彼女は少し悩んでいたようで、沈黙の後にゆっくりと「全部の色が好き」と、少しはにかみながら答えたのでした。

その時の彼女が沈黙した時間と、言い放ったその言葉は、私には彼女自身を象徴するものだったように感じられました。色を人一倍愛する彼女だからこそ、巷によくある「好きな色はなんですか?」という問いかけは、彼女にとって難しい質問だったのだと思います。

私が「彼女は色を愛している」と明言した理由は、彼女のお母さんが話してくれたエピソードにありました。彼女は当初、絵を描くのに色鉛筆を使っていたそうです。しかし、色鉛筆をマーカーに変えてから、彼女はより生き生きと絵を描くようになったとのこと。その理由は、色鉛筆では筆圧で色が変わってしまうのに対して、マーカーならいつでも同じ色を出すことができるからだということも知りました。

それを聞いて私は、彼女が色に対するこだわりが強いのだと確信しました。先ほどの「全部の色が好き」という彼女の発言が、決してい加減な言い方などではなく、本心からの言葉だったと感じられる話でした。

もう一つ、お母さんから聞いた話の中に興味深い話がありました。ミナさんは普段からよく家の片付けをするのだそうです。それは、部屋を綺麗に保つためなのも理由の一つですが、大きな要因は「物の位置に敏感だから」かもしれないと仰っていました。家族の誰かが家具の位置を少しでもずらしてしまうと、彼女はそれに敏感に気づくのだそうです。これについては、私も「そういうことか」と納得するお話しでした。

なぜなら、私が思うに彼女の絵は、とても収まりが良く、しかも配置や配色のバランスがとても心地良く感じられます。

彼女は色を塗る時に、一か所を少し塗ってはまた違うところを少し塗る、という描き方をするらしく、彼女の絵の迫力は、彼女自身が持つ「配色」と「位置」の美的感覚に起因しているのだと、大きく頷ける話だったのです。

私が初めて彼女の絵を見た時から思っていたことでしたが、彼女が持つ優れた美的感覚の源流となる要因を紐解けたことで、より一層、「彼女と共有したこの時間を一つの作品として残したい」、「彼女と一緒に小説を作りたい」という思いを強くしました。

ミナさんにもお母さんにも協力をして頂けることになり、そこからの時間は、彼女自身の事など、小説を書くにあたって必要なことを質問していくことにしました。

今回の小説制作で一番最初に二人で決めたことは、「小説の中に争いごとや互いを傷つけあうシーンを入れない」ということ。これは、彼女からの提案でした。私はこの意見こそが彼女のアイデンティティなのだと感じ、ここは大切にしていこうと思いました。

次に、彼女の好きな映画やアニメ作品などを聞いてみました。考えあぐねている彼女に対して、ジブリ作品のアニメに絞って質問してみると、『となりのトトロ』が好きで、中でも「メイちゃん」が好きだということが分かりました。また、『崖の上のポニョ』はそれほど好きではなく、『魔女の宅急便』に関しては「まあまあ」との答えでした。

回答に悩みながらも、自身の好きな映画やアニメ作品については、とても明確に答えてくれるミナさん。しかも、その好みがはっきりとしていたのがとても印象的でした。

好きな動物についても聞いてみました。彼女の答えは「チャボが好き」と。彼女の周囲にいて「チャボ」は割と身近な動物であるとのことで、彼女の趣味、嗜好、価値観は彼女自身の手の届く範囲にある事象やモノに重きを置いているという証明なのかもしれません。とても彼女らしい答えであると思いました。

以上を踏まえて、次号では私が感じたミナさんの世界観と彼女の作品からの発想で、短編小説を紡ぎたいと思います。

清野ミナさんが描いた作品は、とても緻密で色彩が豊か。

優しい色と配色が作り出したのは大きな力だった
その力に突き動かされて作る小説が今から楽しみ

私は贅沢な時間を過ごすことが出来ました。ミナさんの絵を鑑賞するだけではなく、その作品ができるまでの過程をご本人とご家族に説明して頂けたのでした。彼女の作品を手に取り、ページを捲り、眺め、一つ一つの配色と、全体の絵の形状を交互に見ていたあの時間は、壮大でゆっくりとしていて、鮮やかに記憶に残っています。

次号は、そんな素敵な経験を小説にしていきたいと思います。彼女の画風から感じたことをメインに、一つ一つ、大事に紡いでいこうと思います。本企画２作品目の小説、お楽しみに。

本企画「つむぐ」ではご意見、ご感想と共に、小説作りに協力して頂ける人も募集しております。お気軽にお便りをお寄せください。

お便りのあて先／お問い合わせ　〒163-0632 東京都新宿区西新宿1-25-1　新宿センタービル32F
一般財団法人「メルディア」事務局／担当 鷺坂　TEL : 03-5381-3213　MAIL : prd@san-a.com

障がいがある子を預かるサービス急増に数の増加を喜ぶ一方、質の問題を問う声も。

幼い子どもを抱える共働き世帯にとっては、安心して子どもを外に預けられる施設の存在はとてもありがたい。待機児童問題が未だ解消されない現在、障がいのある子どもを預けられる「放課後デイサービス」が急増している。だが、急激な増加の一方で、粗製乱造を危ぶむ声も聞こえなくもない。

共働き世帯のニーズを受け ここ5年で事業所が急増！

障がいのある子どもを、授業終了後の放課後や長期休暇中などに預かり、「障がい児の学童保育」とも呼ばれている、「放課後等デイサービス」（以下、放課後デイ）の事業所数が急増している。その一方で、新たな制度がどうしても孕みがちな弊害も同時に顕在化しつつある。

そもそも放課後デイは、障がいのある子どもの居場所として、2012年度に児童福祉法で制度化されたものだ。費用は利用者が1割を負担し、残りの半分は国が、さらに残りは都道府県と基礎自治体が半分ずつ負担する仕組みになっている。所得に応じた上限があるが、高所得世帯を除いた概ねの月の利用料は4600円が上限だ。障がいの中身については特に明確な規定があるわけではなく、知的障がいの子供だけでなく、発達障がい、身体障がい、重症心身障がい、その他、一般の学童保育では対応が難しい子ども全般を対象としている。

共働き世帯からのニーズが高いことは言うまでもなく、制度化された2012年度は2540事業所だったものが、2017年4月時点では、10613事業所にまで急激に増え、利用者数も約16万人を数える。

もちろん、ただ子どもを預けるだけの施設ではない。本来的には、障がいのある子どもの生活能力やコミュニケーション能力が高める訓練をする場所だ。

関東で放課後デイを複数カ所展開する事業者の活動内容を見ると、平日は指導員が学校まで車で迎えに行き、お絵かきや工作などの個別療育、休憩・おやつ、集団でのゲームや散歩外出のグループ療育があって、掃除や片付けなども行うとされている。また、土日や長期休みには、朝の会があって、音楽・リズム体操の時間、学習・体操の時間、そして掃除などがあるようだ。

なぜこれだけ急激に増加したかと言えば、まずはその利便性にニーズがあったということがその前提にある。しかも、送迎サービスが付いて利用料の自己負担も軽いとなればなおさらだろう。連日、夕方遅くまで子どもを預けている例も見られるという。だが、そのニーズに応えんがために、当初から開設の条件を緩やかにしたのがその理由だ。つまり、異業種を含めた新規参入が相次いだのだ。

サービスの質にばらつきも 今年4月には基準の厳格化

試しに放課後デイでネット検索をするとこんな文言のページが出て来た。「放課後等デイサービスの黒字開業―融資獲得率100％の税理士が支援」。謳っている文言そのものが悪いことは言えないが、どうも違和感は拭えない事業者の増加と共に、事業者の事業の中身に関する苦情の声が広がってもいるとなればなおさらだ。事業所によっては、職員の数が少ない上に大学生のバイトのような者もいて、子どもに対する対応も、ただテレビを見させていたり、ほとんど放置に近いような状態に置いているところがあると言うのだ。

そもそもが緩やかな運営基準の甘さがあり、自治体の監視も届きにくい。不正な報酬を受けとっていたり、必要な職員を配置していなかったとして、2016年2月までには全国で20の事業者が指定取り消しなどの行政処分を受けた。この点について、厚生労働省でも最初の制度設計の甘さを認める。

「補助金が出る仕組みですので、事業者としては持ち出しが少なく、緩い基準の中、安易な事業者の新規参入が増やしてしまったことは否めません」（厚労省担当者）

そこで厚労省としてもすでに制度の厳格化には動き出している。

最初の制度では、放課後デイは子ども10人に対し2人の職員の配置を最低限義務付けていたが、職員の資格については特に取り決めてはいなかった。そこでこれを今年の4月から改め、子どもに対応する職員は児童指導員や保育士、障害福祉サービスでの勤務経験がある人に限り、管理責人者は、障がい者や子どもに関わる分野で3年以内の実務経験がある人という条件を新たに設けた。そして、現在の事業者に対し、4月までに職員の資格基準を満たすように求めている。

ただ一方で悩ましいのが、資格を厳格化することで新たな要件をクリアできない事業所が続出した時の混乱が予想されなくもないことだ。厚労省としては、「健常者の場合でも通常は保育士が対応しますよね。当初の制度設計のミスと言えばその通りですが、我々としては最低限の底辺の部分の改正であると考えています」（同前）という。

いずれにせよ、優良な事業者が増えて、本当に困った人が安心して利用できるサービスが得られるようになることが必要だろう。

映画　主人公のモデルとなった木田俊之氏（本人）に取材

いのちあるかぎり・・・木田俊之物語

取材・文／渡邊希望

「いのちあるかぎり…木田俊之物語」。一昨年に公開され、話題となった一本の邦画の題名だ。この映画の主人公は演歌歌手の木田俊之。彼が歌手としてデビューするまでの半生が描かれている。主人公が、次第に全身の筋肉が衰えていくという難病に冒されながらも、その病魔と闘いつつ演歌歌手を目指す――という、正に「いのちあるかぎり」というタイトルに相応しいストーリーだ。この映画に登場する主人公のモデルとなった木田俊之氏（本人）を取材するべく山形県へと向かった。

【主人公のモデルとなった歌手 難病と闘いながら全国を行脚】

映画「いのちあるかぎり・・・木田俊之物語」の主人公・木田俊之にはモデルとなった人物がいる。それが、みちのくレコード所属の歌手・木田俊之（きだ・としゆき）氏。

この映画の中で描かれた通り、難病と闘いながらも、地元・山形を始め、全国各地での歌手活動を精力的に行っている現役の演歌歌手だ。

本誌では今回、この木田俊之さん（以下、木田氏）に取材する機会を得て、氏が活動と生活の拠点を構える山形県へと向かった。

木田氏が抱えている病気は、「遠位型ミオパチー（筋ジストロフィー）」。同映画の中でも描かれているように、発症すると身体の一部の筋肉が萎縮し、病気が進行するにつれ全身の筋肉機能が徐々に失われていくという難病だ。未だ有効な治療法が確立されておらず、この病気に苦しむ多くの患者が世界中に点在する。

木田氏は、発症から30年。現在では首から下の部位を随意に動かすことができない。そのため今回は、氏の妻・智恵子氏の協力のもと、取材を行うこととなった。

本記事は、木田氏に質問した事項に対し、本人から得られた回答を基にして、智恵子氏と編集部とで、その内容をまとめたものです。

【障がい者を可哀そうだとは思わないでほしい（木田氏）】

まず最初に、「障がいについて」と木田氏に質問したところ、その答えが「障がいを可哀そうだとは思わないで欲しい」だった。「自分は恵まれている」、「病気になったからこそ得られたものが沢山あるからだ」と続けた。

木田氏が同病を発症したのがおよそ30年前、氏がまだ30歳の頃だという。医師から病名を宣告されたものの、「その時はショックを受けたわけではなく、まるで実感が湧かなかった」と述懐してくれた。

また、「障がいを持ったことで気付いた（気付かされた）ことは？」の問いに対しては「他人（ひと）の暖かさ」だと迷わずに即答した。

例えば、「エレベーターに乗る際に必ず誰かがドアを押さえていてくれる」という。時に、長い階段の下で昇り方を考えあぐねていた氏の姿を見かねた若者たちが、車いすごと担いで階上まで運んでくれたこともあったという。これらだけでなく、「周囲の暖かさ」を感じたエピソードは枚挙に暇がないともいう。

「障がいが無ければ歌手にもなっていないだろうし、妻（智恵子氏）とも一緒にいなかったかもしれない」と笑いながら述べた後に、「それでもやはり障がいを持ってから気付いたことは他人の暖かさだった」と改めて口にした。

この時に木田氏は、「病気に感謝している面もある」と付け加えた。彼が実感した「人の暖かさ」が持つパワーは計り知れない。これを「歌を聴きに来てくれる人たちに伝えたい」とも。

【やる人とやらない人がいる 人の違いはそれだけのこと】

木田氏は「健常者と障がい者の違いは何もない」と前置きをした後、「何事に関しても、それをやる人とやらない人がいる。人の違いはそれだけのこと」だと語った。

治療のために一時入所していた障がい者施設で、機能回復の訓練を受けている時に見たり、そこで経験したことから、強くそう思うようになったそうだ。同じ施設の中にも、物事に対して真剣に取り組む人とそうではない人がいる。それは一般社会においても同じことで、肝心なのは「その人がどんな人かということ」だと。

理不尽なことではあるが、「障がい者だから」という理由で偏見を持たれたり、揶揄されることは多くあることだ。しかし、氏はこう言う。「反対に、障がい者だからと必要以上に気を使うこともない」、「誰でも歳を取れば取っただけ、それだけでも身体が不自由になっていく」、「だからみんな同じ」なのだと。

木田氏の話ぶりは、自身の状況を悲観するような素ぶりが一切なく、むしろ彼の話からは周囲に対する感謝が溢れていて、その一語一語に氏の人間性と、歌手として観客を魅了するに値する「何か」が垣間見えた。また、氏が話す言葉には、ありのままを受け入れ、周囲と自分とを客観的に見据える様が常に見て取れた。

映画「いのちあるかぎり　～木田俊之物語～」公式サイト
http://www.movie-kidatoshiyuki.com/

バリアフリー化の進行具合はまだまだという感が否めない

日本のバリアフリー化については「まだまだ」だと木田氏はいう。歌手活動や講演などで全国を回ることの多い木田氏。国内におけるバリアフリーの現状についても、それを実際に目にし、そこに触れることも多いはずだ。

駅や病院など、公的交通機関や公共施設の多くはバリアフリー化が進行しているのに対し、飲食店や商店街などでは、未だに整備が進んでいないという意見を聞くことも多い。

また、神社仏閣などにも詣でてみたいと思ってはいるが、階段や段差が多くて、「行きたくても行けないことが多い」と語った。施設によってバリアフリー化の進行や整備の度合いに差が出ているというのが現状のようだ。

実感と理解の先にあった共感 木田氏が語る「障がい」とは

木田氏が語った通り、人は体験したものや実感したものでないと、物事が持つ本当の意味や内包された真意を理解することは難しい。そして、氏は障がいを持ったことで、人の暖かさを「実感」出来た。「病気に感謝している面もある」と語ったことにも頷ける。

木田氏が感じた「人の暖かさ」も、もちろん「障がい」に関する現状だ。各々が多少なりとも障がいについて考えていたからこそ氏は「暖かさ」を感じることができた。

世間ではよく「一人一人がもっとバリアフリーについて考えていくべきだ」という論調が聞かれる。しかし、木田氏はこの意見に対して「それは難しいことだよね」と斬った。「障がいを持つ」人の心情などは、「自分自身で不便や不自由を実際に感じてみないと分からない」と。

木田氏が歌手活動を初めて20年。初期からのファンだった方の中には、この間のうちに病気を患ったり、障がいを持った方もおられるのだそう。そんなファンの方々が異口同音に言うのは、「木田さんの気持ちが分かった」だった。木田氏のファンである方々も、自身が病気になったり、障がいを持ってから、不自由なことや不便なことを実際に経験する。そうなってから「気持ちが分かった」と改めて話すのだと。

そう、自分の身に置き換えてから他人の境遇や環境を考えるということは、実際にそれを経験してからでないと理解など出来る事ではない。「一人一人が考える」とは、口で言うほどと簡単なものではない。人は、実感して初めて真の意味を理解する。

手助けはするべきであるが「障がい者だ」と区別しない

「世の中に悪い人はいない」

これは木田氏の持論なのだという。「生きてきた中でそう（悪く）思われる人になってしまっただけで、そもそも物事の良し悪しについての区別でさえ難しいものだ」と語った。

現在、木田氏のご子息が養護施設の職員として働いている。氏に知的障がい者についてを伺うと、「知的障がいかどうかの線引きがどこからなのか、その基準は役所の人しか分からない」と、その印象を述べている。

ここまでの取材で、木田氏の意見の多くには共通する点が多く見受けられた。それは、氏の発言に「（障がい者を）わざわざ区別する必要はない」という意味合いがある事だ。

「障がいを取り巻く現状」に関して、改善のために重要な課題である「一人一人が障がいについて考える」ことについては、もしかすると、あとほんの一歩なのかもしれない。その一歩を踏み出すための提案として、氏のように、「必要以上に区別をしない」という考えを持ってみることが必要となるのかもしれない。

木田氏は、自身が置かれている状況を悲観していない。周囲に「努力をして欲しい」とも言っていない。しかし、「みんな同じ」だという彼の言葉は、誰もが見て見ぬふりをしてきた「自分に不都合な真実」を鋭く指摘していた。

「障がい」を取り巻く状況を、遠からず誰しもが、いずれ実感するようになるのだということを頭の片隅に置いておくべきだろう。

映画「いのちあるかぎり･･･木田俊之物語」

監督・脚本　渡邊豊／2016年度作品

――1982年。家族も得て、幸せな毎日を送っていた木田を突然病魔が襲った。自暴自棄になる木田を妻・智恵子は支え続け、ボランティア歌仲間との交流を通し、難病と必死に闘う。「紅白歌合戦」出場を夢見て、その実現のために「いのちあるかぎり」を歌い続ける――

■みちのくレコードの第一号歌手・木田俊之は、難病にも負けず、車椅子に座りながら歌う姿と圧倒的な歌唱力により、同じ病気を患う人だけでなく彼の歌を聴いた多くの人に感動と勇気を与え続けている。

■主演：武田知大／出演：鈴木まりあ、植野葉子、武智大輔、大林素子、渡辺裕之、あべ静江、西村知美、本田理沙、フィンガー５・晃、橋本トオル、古川孝、松田えりか、鈴木ゆか、滋野由之、他

映画「いのちあるかぎり　～木田俊之物語～」公式サイト
http://www.movie-kidatoshiyuki.com/

\求人&協業/

各企業や団体からの募集や告知

知的障がい者向けの就労情報や、支援情報、その他の情報または各種の告知を掲載しています。

協業していただける知的障がいのあるアーティスト・企業を募集

知的障がいのあるアーティストが描く作品をプロダクトに落とし込み、社会に提案するブランド「MUKU」は、協業していただける知的障がいのあるアーティストや協業を希望される企業を募集しています。ぜひお気軽にご連絡ください。

名　　称　MUKU PROJECT
募集内容　知的障がいのあるアーティスト／協業企業
所在地　東京都港区赤坂9-1-7 秀和赤坂レジデンシャルホテル654号
お問い合わせ　TEL：080-2844-8293
ホームページ　http://muku-official.com/

キャスト登録者を募集しています　障がいをお持ちの方もぜひご相談ください

仕事と私生活の両立ができ、働く時間や期間を選ぶこともできます。あなたの希望と相手先企業の定時条件が合えば、すぐに働けます。まずは登録から。障がいをお持ちの方もぜひご相談ください。

名　　称　株式会社キャスティングロード
労働者派遣事業（許可番号13-070563）
有料人材紹介業（許可番号 13-ユ-301076）
本社所在地　東京都新宿区新宿3-1-24 京王新宿三丁目ビル7F
お問い合わせ　TEL：03-6384-0520
ホームページ　http://www.cr2.co.jp/

チャレンジャーさん（知的障がい者スタッフ）募集

おしぼりのことならヴィオーラへ。布おしぼり、紙おしぼり、レンタルタオル等をはじめとした様々な日用雑貨を取り扱っています。多くのチャレンジャー（知的障がい者スタッフ）がいきいきと働いています。

名　　称　株式会社ヴィオーラ
業務内容　レンタルおしぼり業
本社所在地　茨城県水戸市見川町2131-404
お問い合わせ　TEL：029-241-8251
ホームページ　http://www.viola.co.jp/

\募集&告知/

各種募集と告知

知的障がい者向けの就労情報や各種告知と募集を掲載しています。布施博または大矢真那が取材に伺う「訪問先」も募集しています。

布施博&大矢真那の訪問先／取材先を募集しています

知的障がい者を雇用する企業や団体、知的障がい者施設、学校、場所、スポーツ会場などへ布施博または大矢真那が直接お伺いして取材させていただき、本誌にてご紹介いたします。

■応募条件
知的障がい者を雇用している（雇用予定を含む）企業や団体、知的障がい者施設（学校を含む）、知的障がい者が活躍されているスポーツ団体、スポーツ大会、地域、場所など
■お問い合わせ
下欄にある「一般財団法人メルディア」事務局まで電話またはメールなどにてご連絡ください
※取材に関して費用等は一切かかりません

募集や告知などの情報を無料で掲載しています

一般財団法人メルディアが発行する「月刊メルディア（本誌）」では、障がい者を雇用する企業や団体、各種の養護施設または学校などの募集ごとや告知などを無料で掲載しています。「知的障がい者を雇用したい」「障がい者施設で開催するイベントを告知したい」などがありましたら、下記の一般財団法人メルディア事務局までお問合せください。

一般財団法人メルディアの活動方針ならびに本誌の編集方針にそぐわない内容、冊子の配置協力をお願いしている各企業の基準に抵触する内容、営利目的のみの内容、特定の宗教や信条に関わると判断される内容、反社会的と判断される内容、公序良俗に反する内容等については掲載をお断りする場合があります。あらかじめご了承ください。

一般財団法人メルディアへのご支援とご協力を募集

障がいのある子供を持つ親の苦労や将来への不安は、他の人には計り知れないほど大きなものがあります。さらに、それが寡婦・寡夫家庭であった場合、経済的な負担、苦労、不安なども一人で背負わねばならない状況に置かれることもあります。

私たち「一般財団法人メルディア」は、会報誌「月刊メルディア」を通じて、誌上に厳選した有益な情報を掲載することで、周囲との情報交換もままならずに不安を抱える人たちの情報源として、その一助となれることを目指しています。

私たち「一般財団法人メルディア」の活動に対するご支援（取材協力・協業の相談・各種支援・支援金・寄付）など、当財団の趣旨に賛同してご協力を頂ける企業・団体・個人を募集しています。右記にある当財団の事務局までご相談ください。

お問い合わせとご相談はこちら　一般財団法人 メルディア

〒163-0632　東京都新宿区西新宿 1-25-1　新宿センタービル 32F
一般財団法人メルディア 事務局／担当：鷺坂（さぎさか）宛て
TEL：03-5381-3213　／　MAIL：prd@san-a.com

一般財団法人 MELDIA

右ページ内の求人の部分に関しては本誌および事務局が斡旋などを行うものではありません。求人に関するお問い合わせは上記に掲載の各企業または各団体に直接お問い合わせください。本ページには最新の情報を掲載していますが、情報提供先の都合等により募集を締め切る場合があります。あらかじめご了承ください。　（一般財団法人 メルディア 事務局）

メルディアグループ
http://www.meldiagroup.com/

株式会社三栄建築設計
〒163-0632
東京都新宿区西新宿1-25-1
新宿センタービル32F

25th ANNIVERSARY
まだ25年、
これからのメルディア

04 MELDIA CONTENTS 2018 APR.

01｜障がい者を応援！
東京都渋谷区・ローランズショップ原宿店 編

05｜トウテミル！
MC＆女優・右手ナギが各方面に「問うてみる」

06｜一般財団法人メルディアとは？
メルディアの基本理念、財団概要、支援事業

07｜布施博が訊く
対談／布施博×衆議院議員・長谷川かいち

11｜知的障がい者施設訪問
栃木県足利市・ルンビニー園 編

15｜水越けいこ連載「M size / はじまり」
水越けいこが愛息・レイくんとの日々を綴る

17｜つむぐ
知的障がい者と一緒に「ものがたり」を紡ぐ

21｜THE 取材！
障がいがある子の「放課後デイサービス」の現状を取材

23｜「いのちあるかぎり…木田俊之物語」
映画のモデルとなった木田俊之さんを山形で取材

27｜求人情報と各種募集
知的障がい者向けの求人情報と各種の募集など

28｜募集と告知
取材先募集と協賛の募集など

MELDIA 4月号　2018年2月25日発行

発行元／一般財団法人メルディア事務局
発行人／小池信三
編集／株式会社サン・オフィス
編集人／東宮恵美
編集長／山口慎市
進行／東宮恵美、山口慎市、谷田貝亘介（新村印刷）
編集部／東宮恵美、谷口智彦、都筑亮太
ライター／水越けいこ、大矢真那、山口慎市、渡邊希望、右手ナギ、加島和彦、横関寿寛
カメラマン／加島和彦、工藤裕之、吉岡晋
ヘアメイク／鳥取まりこ
デザイン／有限会社フレッシャー・アド
印刷製本／QREAS株式会社
協力／MELDIA GROUP 株式会社三栄建築設計、ギャラリーバーン、株式会社LORANS.、ローランズショップ原宿店、篠崎孝司、ルンビニー園、社会福祉法人 善隣学園、長谷川かいち後援会、株式会社TDPミュージックパブリッシャーズ、PHOTO MIO JAPAN、新村印刷株式会社、株式会社協同エージェンシー

本誌の無断転載・複製を禁じます
2018©All Rights Reserved. 一般財団法人メルディア＆月刊メルディア／MELDIA GROUP 三栄建築設計／サン・オフィス

次号予告
MELDIA VOL.5
2018年3月25日
発刊予定

一般財団法人 メルディア
〒163-0632
東京都新宿区西新宿 1-25-1
新宿センタービル 32F
一般財団法人 メルディア 事務局
TEL：03-5381-3213
MAIL：prd@san-a.com